

# 国内研修報告書

## 1. 研修日時

2024年8月26日（月）～30日（金）

## 2. 研修先

香川県小豆郡小豆島町草壁本町 135-10

一般社団法人 小豆島子ども・若者支援機構 ホットスペース ショウ'z

## 3. 研修先について

『どの子供も、大切な「ひとり」&「ひとり」みんな、それぞれ違っていい。自分らしくいられるための居場所を提案します。』を掲げ、小豆島で子どもと若者の支援を行っている2018年設立の非営利団体。子育てにしんどさを感じているお母さん、学校に行きづらいお子さんなどが、それぞれに思い思いの時間を過ごす場所を提供している。社会福祉士も資格を持つスタッフも在籍している。

## 4. 研修テーマ

ありのままの自分で安心して過ごせる自然の中に見つける「居場所」の提案

## 5. 研修内容

- ・子ども宅食、おむすびプロジェクト
- ・子ども食堂
- ・社会福祉協議会にて奨学金に関わる相談に同席

- ・保育園訪問
- ・子どもへの学習支援・交流
- ・食料配布

## 6. 研修スケジュール

8月26日 現地到着

8月27日 食料配布、子ども宅食、おむすびプロジェクト、NPO法人フローレンスの方と交流

8月28日 食料配布、小豆島町社会福祉協議会訪問、子どもとの交流、フリースクール設立の相談に同席

8月29日 子ども食堂、保育園訪問、子どもとの交流

8月30日 帰宅日

## 7. 研修成果

### (1)食料配布

お米をひと世帯1キログラムに仕分けして各家庭を訪問した。お米不足だったこともあり、お米は重宝された。普段よりもお米の依頼電話が多いとのことだった。またNPO法人フローレンス支援のお菓子やレトルト食品も一緒にしてお渡しした。訪問家庭には生活保護受給の母子家庭が多かった。配布活動は近況を報告したり、お子さんやお母さんの様子を見たりして虐待の早期発見をする役割も担っていた。また島内は公共交通機関が乏しいため、車がなければ生活は不便である。生活保護を受給している家庭は自家用車が持てないため、このようなサービスは需要が高い。猛暑の中で子供を連れ、重い買い物袋を持って歩くことは現実的ではないため、食料配布の活動に生活を助けられている家庭は少なくないと実感した。

食料配布の活動の注意点としては、特定の地域にだけ支援をすると、掘り起こすことになってしまうそう。支援を受けることが、貧困や問題がある家庭だというレッテルを張られた気分させることがある。コミュニティが狭いがゆえに、周囲に気付かれやすく目立ってしまうことにも配慮する必要がある。

## (2)子ども宅食

夕食のご飯を作って家庭に配布する活動を行っている。メニューは全て手作りで栄養バランスが考えられている。NPO 法人として自立するためにおむすびの販売を計画(おむすびプロジェクト)しており、今回はその一環でおむすびを作ることになった。共働き家庭で孤食になってしまう子どもや、仕事や貧困などにより栄養バランスを考えて食事を作れない家庭に配り、少しでも栄養のあるご飯を子どもたちに提供しようと始まったそうだ。同封した手描きのメニューも、人のあたたかみを感じさせる。ご飯は単に栄養を摂るだけのものではなく、人と人を繋げるものであると感じた。

※メニューは鶏ひき肉と野菜のカレーピラフおにぎりと梅のワカメのおかかのおにぎり  
野菜は9種類使われており、寄付された野菜も含まれている。

## (3)子ども食堂

子ども食堂では、大人と子どもで食事をつくった。子どもたちの健康が考えられた、無添加で旬の食材を使用したおいしい食事が提供されている。みんなで協力しあって食事を作り、自然と気遣いや準備、片付けの習慣を身につけられるのではないかと感じた。

食事を通して、最初はあまり話したがらないお子さんが私に話しかけてくれたのが印象的だった。また、保護者とスタッフの方がお子さんのことの学習面の相談や、食生活の話をする時間にもなっており、食を通して和気あいあいとした雰囲気ができていた。

## (4)社会福祉協議会訪問

社会福祉協議会にて、生活保護を受給する家庭の、通信制高校に通う3年生の進路相談に同席させていただいた。彼女は専門学校に進学を希望していて、主に奨学金の申請や住宅などの相談を行った。専門学校受験には、オープンスクールの参加が必須であった。今回受け入れてくださった団体の方々の支援があり、受験資格を得ることができていたが、経済的に島外に出る余裕がない家庭の子どもは、受験に関する情報だけでなく、受験資格を得る機会が少ないことも課題であると感じた。

また学習面に関しては、島内に学習塾が少ないためフェリーに乗って塾に通う子供もい

るそうだ。島内でも経済的な格差が学習機会に直結していることが明らかになった。

#### (5) 保育園訪問

保育園訪問では保育園の掃除の手伝いや子どもと遊びをした。午前は3-5歳クラス、午後からは0-2歳クラスの子どもと遊んだ。この体験を通して子どもたちと接するときには、目線を合わせたり笑顔で接したりすることで、相手に安心感を与えることができることがわかった。小さな子どもたちにとって、初めて出会う大学生が自分たちの空間にくることは怖いし緊張するだろう。福祉の現場においても、小さな子どもたちにとって初めて出会う大人の存在は大きいと考えた。また保育園では人権に徹底した配慮がされていた。例えば、静かにして欲しい時、口を拭く時に「お口チャック」と言うことはいけないそうだ。慎重に言葉を選び、自らの発言が子どもに与える影響や、その責任をしっかりと意識しなければならないと改めて感じた。

#### (6) 子どもの学習支援・交流

外出時以外は主に研修先の活動拠点の居場所において、遊びに来る子どもたちや昼食を食べに来る子どもたちとふれあった。子どもたちにカードゲームのルールを教えてもらいながら一緒に遊んだ。学習塾に通っておらず、小さい弟さんがいて、家では勉強がはかどらない中学生の勉強場所にもなっていた。学校にあまり通えていないというギターが趣味の男の子は、東京から移住してきた男性スタッフに音楽を教えてもらっていて、楽しそうにしていた。学校では出会えない、少し上の世代との交流は新鮮な体験ができることに加えて、年上とのコミュニケーション方法が自然と身につくのではないかと感じた。それぞれ好きなタイミングで遊びに来て、自由に居場所を活用し、一人でいたい子どもは一人で、好きな時に好きなことを自由に行っていた。気軽に立ち寄って、必ず受け入れてくれる誰かがいる、という安心感のある居場所は、このような子どもたちにとって重要な場所であることが分かった。都心にもこのように安心して通える場所が増えるとよいと思った。

### 8. 感想

小豆島ではご近所同士の結びつきが強く、町の人がお互いに見守る体制が自然とできているそうだ。異変があればすぐに気づいて、住民同士で支えあう人間関係ができている。その一方で、プライバシーの意識が薄いといった側面もある。島内の課題として、家族経

営のため、営業時間が短く、休みが不定期のお店が多く、住民が普段使いできる場所が少ないことがある。仮にお店ができたとしても、地域の目があることから、車のナンバーなどで個人が特定されてしまい「さぼっている」と思われてしまうため、カフェに行くのは島外に出かけた時だけと話す人もいた。小豆島では人と人との距離が近く、温かい人間関係があるが、このような悩みがあることは知らなかった。新しく施設を作るにしても、地域性を理解していなければ、かえって住民を苦しめてしまうのではないかと感じた。

子供たちに関して、印象的だったことは、都心で障害とされることも、個性的な子、少し変わっている子ととらえられることである。都心ではほかの人と少し違うだけで、排除されたり、いじめの対象となったりすることが多い。特別支援学校に移動したり、すぐに病院で検査を受けたりすることもある。しかし、島では障害も含めその人として受け入れる雰囲気があった。子どもたちの様子も、「子どもらしさ」のある子どもが多い印象を受けた。外でよく遊び、にぎやかで、元気のよい受け答えをしてくれた。島の開放的な自然が影響しているのだろうか、都心にいる子どもたちよりものびのびと生活しているようだった。研修前は、島内のアットホームな雰囲気に溶け込めるか不安だったが、スタッフの皆さんも子どもたちも歓迎してくださり、とても有意義な時間を過ごせた。

左 子ども宅食/右 子ども食堂

